彼とその祖母

犬養　孝

彼が十二三の頃である。

今でさへ氣丈だとか、時には剛情だとかさへ云はれてゐる勝氣な祖母は、その頃、今日は笠森様に、熊谷様には明日に等と次から次へのお詣りに忙しく、また手まわりの仕事は人手にかけるのを嫌つて、お茶も海苔もわざ〳〵日本橋まで出かけて行つて、自分の氣に入つたのを買ふのでなくては承知しなかつた。普通の人ならあの位の年になれば、庭いぢりか孫の面倒でも見ながら、どこか靜かな所に隱居する頃なのにぢつとして居ることが出來ないのが彼女の性分であつた。けれどいつまで達者でゐることも出來なかつた。

その頃の御成街道と云つても、もう市中では可成交通の頻繁な所となつて居た。持つて生まれたその性分がたゝつてか祖母はある四月の午後、黒門町を上野へと歩いてゆく途中あやまつて自轉車に轢き倒されて足の骨を折つてからはまるつきり外出も出來なくなつて、山向ふの根岸と云ふところにわびしい生活を送らなければならなくなつた。尤も轢かれたその時はあんまりそれ程でもなかつたので、附近の醫者にいゝかげんに見て貰つたのが間違ひで、二月許り後れて千住の名倉に入院したけれどその時はもう遲くて、とう〳〵はじめは足腰も立たなかつたが、三四ケ月の後にやつと松葉杖に縋りながら部屋の中を辛うじて歩くことが出來るやうになつた。

祖母は急に變つた運命を時折歎いては生來の勝氣が手傳つて齒ぎしりを噛むのであつたが、足の痛みも段々ととれるに

從つてそのとばつぢりを婆やに向けては無理な註文をして困らせてゐた。

婆やと云ふのは彼のところに働いてゐた二人の女の年をとつた方を、年寄同志でいゝだらうと云ふので祖母のところにやつてあつた女である。彼が父と一緒に祖母をたづねに行くと、いつも婆やは「御隱居樣が……御隱居樣が……」と云つて愚痴を絶やさなかつた。母がたづねて行つた時など、よく婆やに「まあ辛抱してゐておくれよね。お願ひだから」と云つてゐるのを彼はよく見るのであつた。

祖母の短氣も足の快方に向つた始めは反動も加はつて甚しかつたけれど、それも父が行き、母が行き、伯父や孫達がかはるがはる行くうちに段々癒されて、翌年のお正月には晴れた靜かな日など、椽側に出て寂しい日を浴びながら彼と父とで買つてきた鉢植の福壽草に水をやる姿さへ見られた。祖母はもう不具になつたと云ふことを悔いるよりはこれまでに良くなつてきたことによつて慰められてゐるかのやうに、白髮ばかりの髮を日あたりのいゝ椽側にとかす日もあつた。

櫻も過ぎて、騷がしい中に雜沓の花見客を送り出してしまつた上野の山は拭はれたやうに晴れた日を迎へて、木々の葉は色づく、芽生は大きくなる、その息づかひさへ偲ばせて夏を待つてゐた。

彼は二三の友達と動物園のわきから圖書館のあたりにわたつて紅葉や欅の芽生を集めてゐたが、いつか興にひかれて博物館の裏までには十何本かの芽生を得た。

「淸ちやん。もう山番が來るよ。行かないか。」

「うん。」

「叱られちやつまんないもの。」

『ちえッ。もうかへんの。つまんないや。』

淸ちやんと彼が赤鬼靑鬼の前を汽車道の方に歩るきだしたのを殘念さうな顏をした健ちやんも、土だらけな手で橫なぜをしながら走つてきた。

「ね。淸ちやんと健ちやん。この坂を下りると鶯谷の停車場があんだらう。あの汽車道の向ふにおばあさんの家があるんだ。いかないか。ね、いゝだらう。」

「うん、行かう。汽車見ながらね。」

「今日はほんとにいゝお天氣だね。あつたかくて。婆やお前も用が濟んだらこゝにおいでな。」

椽側で日にあたりながら新聞を讀んでゐた祖母はさう云つた。鼻の先に落つこちさうな眼鏡越しに祖母が庭を見た時、電車の驛を出る汽笛が聞えて物干の雀が一むれにぱつと飛んだ。

「はい、たゞ今まいります。お洗濯をして居りますから。」

「あゝ。また明日におしなね。」

どうも肩がこつていけない。眼がちら〳〵して。」

腰骨を二つ三つたゝいて伸びをしてゐると婆やが前掛で手をふき〳〵はいつてきて、

「ごいんきよさま。あちらのお坊つちやまがお見えに……。おやもうお庭に來ていらつしやる。」

「おばあさん。今日は。今日ね、上野で芽生とつてきたよ。これあげよう。紅葉とね、それから欅の。」

「さうかい。よくきたね。まあお上りな。どれ〳〵、何の芽生だつて。」

「僕でもすぐかへる。だつてね、友達がゐるんだもの。」
「どこに。」
「おもてに。」
「呼んでおいでなね。そんな待たせないで。」
「あゝ、呼んでこようか。清ちやんと健ちやん來ないか。」
「僕、待つてら。」
「いゝんだよ。かまはないんだよ。僕のおばさん家だから。」
「さうかい。」
「まあ、ようく。こちらへおあがんなさい。どこのお子さん。」
「學校の友達さ。」
三人が三つ四つの鉢に植えてゐるのを見ながら祖母は、
「前に摩利支天樣の緣日の時お前が買つてきたのはぢき枯れちやつたけれどこれはいせいがいゝね。どれどれ、澤山にまあ。そんなにいらないよ。內へももつて行つてお植えな。」
「ぢあ、もう歸らう。おばあさん。」
「さうかい、まだいゝぢやあないか。ぢあ一寸お待ち。」
松葉杖をついて足をひきづつて行く姿から二人の友の珍らしさうな眼はその姿が襖に消えるまで離れなかつた。
「君のおばあさん、びつこなんだね。」

「あゝ、自轉車に轢かれたの。」

繰り返へして聞く友達に彼は嫌々答へてゐると祖母が來て。

「ぢあまたおいで」

と次の言葉も云ひ終へないうちに、三人は紙包みを手に威勢のいゝさよならを殘して立去つた。

けれど彼は急いで歸りたくなかつた。「若し一人ならとまるんだけど。」彼はそんなことを考へた。と云ふのも彼は土曜から日曜にかけては決まつたやうに少年倶樂部か日本少年を持つて祖母の家にとまりに行き祖母も亦彼が度々來てくれて

「今日は何をおごらうか。え。」

等と彼の好きなものを聞いて、一諸に食事をしたり、寢起きしたりするのが何より樂しみだつた。とまつた晩には彼は遠足の話をしたり、僅かの繪葉書を持ち出して祖母に見せた。さうした時には、

「どれ、ぢあ一寸眼鏡をとつておくれ、」

と云つてわざ〳〵電氣の下まで這ひ寄つて一々その繪葉書を見ては註釋と云はうか、追憶にも似た言葉、時としては「足が惡くさへなかつたなら」と云はぬばかりに、

「あゝ、こゝへ行つた時にはおくにさんが三十五六で……。一ノ宮へ行つた時にはお前の姉さんとお父さんと三人だつた。」

「どうして僕つれてつてくれなかつたの。」

「だつてお前はその時小さくてうるさかつたから。」

「つまんないの。」

かうした晩の翌日にはよく日暮方父が彼を迎へに來てくれた。この頃の祖母は若い者の年頃と同じ樣に年寄達の中での年頃とも云ふべき、いつもにこ〳〵した人好きのする年齡であつた。彼が夜店で針に絲を通す機械を買つて、その次の土曜日に持つて行つて祖母を喜ばせたりしたのもこの頃の事であつた。

けれど、かうして二三年を過ぎるうちめつきり年をとつてしまつて、耳が段々遠くなる、眼がかすむ、足が痛むして來たので彼の家とかう山一つ隔てゝゐては何かの時いけない、不安だから、と云ふので父のはからひで彼の家の裏の離家に祖母をよぶことになつた。

彼はどんなに喜こんだらう。「若しおばあさんも内に一緒にゐたら」とは常々彼の願つてゐたことだ。父がさうしたはからひをしたのも彼が平常父にお願ひしてゐた結果かも知れぬ、と彼はその實現を自分の手柄である如く誇つた。

始めは女中と二人で住むことになつたが、幾冬かたつうちに足腰の痛みが增してむづかしいことを云ふやうになつた。そして今まで程彼もあしらはれなくなつた。暫らく眠つてゐた祖母の惡い性分は年一年の寒さにさまされてああかうと時には嫌味をも交へて母屋にも及ぼしてきた。母から彼へ、彼から姉へ苦しい立場に立つやうな事もあつた。そのため女中もゐつかずとう〳〵彼が中學の三年頃になつて女中の代りに彼が祖母の身のまわりを務めることになつた。けれど一から十までの嫌味は彼を惱ました。

學期試驗の折にも晩酌をしてゐる祖母の前で勉强しなければならなかつた。おちよこを置いては

「もうお迎へが來るだらう。お迎へが。何の因果か知らないけれどあれはあんなになつてしまつたし」

また一ちよこ飮んでは、

「もうお迎へが來てもいゝ。經帷子でもこしらへときませう」

夕飯が濟むと脚爐にはいつて赤らんだ顏を、時に俯伏して「南無阿彌陀佛」「南無阿彌陀佛」を口の中に唱へながら眠りに入つてしまふのであつた。その言葉も次第に微かに「なんまいだ」と消え入る頃になると、彼は祖母の運命を靜に見守つた彼には祖母を捕へようとする死の神がちらついて見えるやうであつた。「よし來ても祖母をわたすことはない」さう思つてゐると、またが微に「なんまいだ」が聞えてくる。

「おばあさん。風邪を引きますよ。うたゝねすると。もう床がとつてありますから」

「あゝ、ありがたう」

日に〳〵皺を增してゆく顏の中の小さい眼が薄氣味惡く光つた。

ある日學校から歸つて見ると明るい窓の下でお針を持つてゐた。

「おばあさん。たゞ今。何縫つてるの。姉さんに縫つて貰つたらいゝぢあありませんか」

「いゝや、これは何でもないよ。お迎への用意さ」

と寂しく異樣に笑つた。

又ある日彼は友人と御嶽に登つた。その午後から雨が降り出して歸へりが遲くなつた時祖母は入口に、

「立別れいなばの山の峯におふる

　まつとしきかば今かへりこん」

と書いて貼つてをいた。彼はその時祖母に濟まないとも思つたが、祖母が彼等係累に對する愛着と死への焦慮との喘ぎをまざ〳〵と想ひ浮べて淚ぐましくなつた。

祖母の身体も大震後は、めだつて衰へた。大震の時は彼の背に負はれて押寄せて來る火を浴びながら、日暮時、動きのとれない避難民の中を巣鴨まで運ばれた。そこでねついてから再びもとの家に歸つて來ても床についたまゝの身となつた。後に彼が高等學校に行つてゐることを「一人前になつて働いてゐる、安心した。」等と彼の父にもらしたりした。

冬の休みに歸省した彼は祖母の衰へきつた姿をもとの床の上に見つめる事が出來た。彼がたづねた時祖母は眠つてゐた。徽かな鼾が朝の日光に融けて行つた。起こさうかどうしようか彼は躊躇して暫し起きてゐた頃の祖母の姿を回想した。

「たかちやんや、何にしようかい」

ふと耳元にたづねる聲。あゝ、けれどそれは幻影の彼をさいなむ聲だ。祖母はねてゐる。手は痩せ細つて。

「おばあさん。たゞ今。今日かへつて來たの」

「おゝさうかい」

「身体はどう」

「寒むくて〱もうねたきり。お前も丈夫だつたかい。え」

「えゝ」

「そこに姉さんところから送つて來た梨があるからお上り」

「えゝ、ありがたう」

「あ、ほんに、こないだは飴をありがたう」

「おばあさんにいゝだらうと思つてね」

「お前にはもう會へないと思つてゐたが」

と云つて聲をくもらせた。
「十五日許り休みがありますから又來ます」
「さうお」
十五日は立つた。彼は翌朝再び去らねばならない。
その夜暇乞ひを告げた。
「もう歸るの。こんどこそあたしはお前に會へないね。生き分れだよ。こんどお前が來たらお墓で會はう」
「どうして、おばあさん、そんなこと」
「いや、もう駄目だよ。うちはお前に頼みます。お墓で會はう」
彼は胸が抑へられる思ひがした。彼は祖母に手を借した。祖母は私の顏を見つめた。
「見おさめに」
「そんなことありませんよ。お大事に。ではまた春きます。さようなら」
彼は出來るだけ祖母を勵して別れた。けれど彼にもその不安は去らなかつた。
たてた障子を再びあけた。祖母はぢつと彼に眼を据ゑた。言葉はなかつた。
靜に障子をたてた。
空は凍りきつて星のみがきらめいてゐた。
「お墓でね。お墓で」
彼は耳を閉ぢて急いで母屋に走つた。

（一六九二、一、一二）